

# 子どもたちにおける友人関係の変化

## —1.5次集団の形成とネットいじめの実態から—

佛教大学大学院 堀出雅人 教育学科教授 原 清治

### I. 学校をとりまくさまざまな問題の とらえ方とネットいじめの発生

文部科学省がおこなった平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると小・中学校と高等学校の国公立を合わせたいじめの認知件数は84,648件であった。いじめの様態別にみると「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる」といったネットに介した新たな形態によるいじめは平成18年度同調査では4,883件（全体の3.9%）、平成19年度では5,893件（5.8%）と増加傾向にあり、平成20年度では4,527件（5.3%）と高止まりを示している。学校種別にみると、ネットを介したいじめは小学校で457件、中学校で2,765件、高等学校で1,271件、特別支援学校で34件が認知されている（平成20年度）。

なぜ、ネットを介したいじめ、すなわち、ネットいじめが発生するのか。ネットいじめに対してその背景にある子どもの実相を理解しないまま、有害サイトへのフィルタリングをはじめ対処療法的な施策や取組みで規制を強化しても、抜本的な解決策を講じることができないと考えられる。たとえ規制を強化したとしても、必ずといっていいほど、抜け道を探し出し、新たな手法のネットいじめが生じている。いわば規制する側といじめの手段としてネットをもちいる者との「いたちごっこ」が続いているといえる。本稿では、今日の子どもたちの人間関係の内実  
に迫らなければ、ネットいじめという事象がな

ぜおこるのかその本質を見落としてしまう危険性があるという認識にたつ。荻上（2008）も指摘するように、ネットいじめをこれまでの学校病理としてのいじめ研究に引きつけて論じる必要があると考えられる。今日、学校での子ども  
の友人関係は「現実世界」だけで完結するものではなく、「ネット世界」でも「現実世界」の友人関係を維持しなければならない状況におかれているといえる。

そこで本稿では、いじめの歴史の変遷を振り返り、いじめ問題の今日的な特徴がどこにあるのかを整理したうえで、ネットいじめがその延長線上のどこに位置付くのかについて論じ、特に友人関係の変化とネットいじめの関連性を考察することで、今後のネットいじめ対策の一助とすることを目的としたい。

### II. いじめ問題の変遷と今日の特徴

2007年、文部科学省はいじめの定義を「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的に攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」から「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」、「いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行うよう徹底させる」と変更した<sup>(1)</sup>。しかしながら、いじめと一口にいってもさまざまであり、その行為がいじめであるか否かを判

別する基準もあいまいであると言わざるを得ない。したがって統計上の数値に挙がっているいじめは、あくまで教師などの第三者によって「発見」されたいじめであり、当事者以外の者からの「見えにくさ」がその特徴のひとつとしてあげられる。

また、いじめの概念規定に関しては、いじめの側といじめられる側の「フレーム間の矛盾」も統計の信頼性に大きな問題を投げかける。つまり、いじめは初期の段階において、いじめられる側の主観的世界に基礎をおいた現象ではあるものの、いじめる側の動機にも目を向ける必要があった。これまでのいじめは、この2つが一致したもの、すなわち「加害者の側が、加虐的感情を込めた行為によって、被害者側が身体的・心理的苦痛を感じているもの」をいじめとして取り扱っていたが、実際にはこの両者は必ずしも一致するものではないことが指摘されるようになった。行為主体の動機のかんにかかわらず、この行為を受けた客体の方が被害感情を抱くような場合や、その逆のケースも考えられるのであり、これらのケースはやはり概念規定上の制約から統計上の数字に現れない暗数となることが多いのである。

さらに、統計上の信頼性に影響を与えるものとしては、担任教師が、その「責任感」からいじめの事実を隠蔽したいという思い、学校やPTAが子どもたちの進学や就職への悪影響を考慮した「教育的配慮」のよるいじめ事実の否定による過少報告なども指摘せざるを得ないというのが実態であっただろう。

それに対して、近年のいじめを見えにくくさせている原因をひとことでまとめるならば、一定の仲間関係のなかにいじめが入り込みはじめたことがあげられる。

それは、前述したような「フレーム間の矛盾」の延長線上に位置づけることもできよう。すなわち、いじめる側といじめられる側によって、

いじめの認識がズレるために、いじている側は「いじめとは思っていない」行為が、いじめられる側からは「いじめられたと思う」というようなことが頻発するのである。例えば「ジュースをおごってやるから、俺のも買って来い、とって2人分のお金を渡して使い走りさせろ」タイプの行為がこれにあたる。お金を出す(いじめる)側は、おごってやるのだから「いじめではない」と言い張るであろうし、ジュースを買いに行かされた(いじめられた)側は、いやなことを強要されたのだから「いじめだ」と考えるかもしれない。いじめのなかには、こうした認識のズレを巧みに利用して、「遊び」や「ふざけ」に偽装されているものが多く、それによっていじめの巧妙化や隠蔽化がさらに進んだという指摘もできる(原, 2009)。

## II-1. 共依存関係のいじめ

最近のいじめのなかに多く見られる傾向として「共依存型グループ」のいじめがあげられる。これは、グループ内でおこなわれるいじめであり、いじめられている側が、抜け出たくても抜け出せない状況において起こる。その背景には、現代の子どもたちは学校に居ながら孤立することに対する不安や恐怖感が大きく、グループで「群れて」いることを強く望む傾向があることが原因としてあげられる。

子どもたちのグループ意識が変化していることは、多くの現場教員の意見からも聞こえてくる。たとえば、子どもたちには、2人のグループよりも3人以上のグループがより好まれるのはなぜだろうか。それは、3人いればたとえ1人が病欠しても、2人が残り、学校での1日を1人で過ごさなくてもすむからだというのである。この場合、グループにはいわば「保険」のような友だちの存在が必要なのである。また、3人であることで、2対1になることにも不安を感じている。したがって、トイレに行くにも

3人一緒という現象が小学校、とくに女の子の集団で起こっている。このように3人以上がキーワードとなっている理由には、学校に1人であることへの極度な不安感や恐怖感がある。

このように考えると、子どもたちは1人でいるくらいなら、グループ内でいじめられても、そのグループから離脱するよりは、むしろ形式的に依存関係を続ける方が安心できるという奇妙な関係が構築されるのであり、それが「共依存型のいじめ」を増加させる背景となっている。

表1のデータは、そうした仲間関係にいじめがあることを指摘した興味深いものである。この表からは、日ごろから「よく遊んだり、話したりする」グループの「仲間」同士に、いじめ関係が多く存在することがわかる。「いじめられるくらいなら、仲間をやめればいいのに」という指摘は彼らにはあたらぬ。また、仲間グループでのいじめであるから、教師にはなかなか見抜くことができない。具体的には、いじめられている側は、大縄跳びでは常に回し役、プロレスごっこでは、常に技をかけられる役であったりする。今回の調査時のインタビューからは、鬼ごっこで一度も鬼になっことがない子がたくさんいる一方で、必ず（いつも）鬼にしかならない（なれない）いじめられっ子の小学生の姿が見られた。その子がネットの中でもいじめの被害者となっていたのだが、いじめる側は罪悪感の軽減や解消、周囲からの非難の回避をもくろんで、いじめ行為を正当化しようと工作する。このとき「仲間同士」という言い訳は、いじめっ子にとって好適な隠れ蓑となる。

このようにいじめの偽装は巧みにおこなわれ、いじめとして発見することが困難となるのである。また、いじめられる側の立場からみれば、人間としてのプライドや他者への「やさしさ」が、いじめ被害の事実を口外させないといった被害者の側の「見せにくさ」も指摘できる。さらに、共依存型のいじめでは、いじめられる側は、「自分がいないと他の子がいじめられる」という他者への「やさしさ」まで存在する。このような場合も、いじめがエスカレートしやすく、金品の要求などが重なって自殺や犯罪行為までにいたるケースの温床となりやすいのである。

このようにいじめの偽装は巧みにおこなわれ、いじめとして発見することが困難となるのである。また、いじめられる側の立場からみれば、人間としてのプライドや他者への「やさしさ」が、いじめ被害の事実を口外させないといった被害者の側の「見せにくさ」も指摘できる。さらに、共依存型のいじめでは、いじめられる側は、「自分がいないと他の子がいじめられる」という他者への「やさしさ」まで存在する。このような場合も、いじめがエスカレートしやすく、金品の要求などが重なって自殺や犯罪行為までにいたるケースの温床となりやすいのである。

## II-2. 立場の逆転現象

最近のいじめの報告でよく指摘されているものに「立場の逆転現象」がある。従来までは、いじめは、加害者と被害者がはっきりと分かれており、いじめられるタイプを容易に判断することが可能であった。しかし、近年ではいじめの加害者と被害者との見極めが困難になり、誰が被害者となってもおかしくない状況が子どもたちの世界に存在するのである。どのような子どもが被害者となるかはわからず、子どもたちは常にその対象に自分が置かれぬかを恐れている。そのために、自分でない自分を演出・演

表1 被害者と加害者の付き合い方

| 属性           | 性別          |             | 学校別         |             | 全体          |
|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|              | 男性          | 女性          | 小学校         | 中学校         |             |
| よく遊んだり話したりする | 44.1% (191) | 51.8% (265) | 51.3% (232) | 45.5% (225) | 48.3% (457) |
| 時々話したりする     | 36.7% (159) | 29.1% (149) | 33.4% (151) | 31.9% (158) | 32.6% (309) |
| ほとんど話をしない    | 15.5% (67)  | 17% (87)    | 13.7% (62)  | 18.6% (92)  | 16.3% (154) |
| ほとんど知らない     | 3.7% (16)   | 2.1% (11)   | 1.6% (7)    | 4% (20)     | 2.9% (27)   |
| 計            | 100% (433)  | 100% (512)  | 100% (452)  | 100% (495)  | 100% (947)  |

出典：森田洋司監修『いじめの国際比較研究』金子書房 2001年 p79

技することで自己を防衛しているのである。しかし、今日は加害者であったとしても、何らかのきっかけによって明日からは被害者へと変化するようなことが起こる。このような立場の逆転現象がくり返されているといえる。

また、あるグループでは被害者である者が、他のグループ(ここでは自分より弱いグループ)では、加害者となっていじめをおこなっているという事例もある。いじめられたストレスを、他の弱いものへと向けるのである。

こうした背景には、被害者になることの恐怖心が加害者になることを誘発しているのではないかと、という指摘がなされることが多い。仲間に誘われて、同調していじめなければ、自分が逆にその対象とされることへの恐怖心から集団に過度に同調してしまうのである。このように、仲間集団の曖昧性や友人関係の希薄化から考えると、あるときは被害者であっても、集団に同調する意識さえあれば容易に加害者にもなり得るため、他の子に対して自分がいじめられていた時に感じたつらさをやり返すことができるのである。子どもたちは、被害者、加害者という区別が曖昧であるがゆえに、誰でもいじめの対象となる可能性があることをよく理解している。その恐怖のために、よけいに加害者をいじめに駆り立てるといふ現象が起こるのである。

### Ⅲ. いじめ問題研究の潮流

いじめについての研究は、これまでにさまざまな調査・研究がおこなわれてきた。そして、その原因や過程が少しずつではあるが明らかにされてきている。ここでは、いじめの原因を大きく4つに分類してみたい。(原、2008など)

#### 1. 性格原因説

いじめの原因を、被害者や加害者の性格に問題を起因させる考え方であり、比較的初期のい

じめ研究である。例えば、加害者の特徴として「落ち着きがない」、「無神経である」、被害者としては「小心者」、「依存的性格」などのように性格に問題があるという見方をするものである。つまり、いじめは被害者と加害者の性格を直せばいじめは回避できるという考え方であった。しかし、この考え方があまりに短絡的で、結果を急いだ指導であることは論を待たない。

#### 2. 機会原因説

いじめの発生は、あくまできっかけにすぎず、所属している集団の状況や雰囲気によって左右されるというものである。いじめは、個人の所属する集団にいじめが発生する雰囲気があり、そこにある種の出来事や個人的な性格がきっかけとなって発生するものである。例えば、何をするにも行動が遅い子どもがいたとしても、所属する集団によってはいじめが発生しないこともある。ここで、問題とされるのは、個人のどのような特性においてもいじめのターゲットとなることである。つまり、われわれがもつさまざまな特性や資質は、それらが他者に許容される一定の幅あるいは強度を有している。そして、そこから少しでも外れる場合に、いじめの標的となるのではなからうか。言いかえれば、子どもの世界では、「普通」であることが求められ、その「違い」は「間違い」ではないにもかかわらず、排除の対象となる。例えば、学業成績が良好「すぎ」たり、容姿が整い「すぎ」たりする場合においても、いじめの被害に遭う可能性は高まるのである。従来ならば、いじめの対象者はマイナス面をもつ者であったのが、近年ではプラス面もいじめの発生原因となるとところに今日の特徴の一端がうかがえる。

#### 3. いじめの4層構造説

森田洋司・清永賢二(1994)は、いじめを学級集団全体の問題であると捉え、加害者と被害者というものだけではなく、その周りにいる「観衆」や「傍観者」の役割や存在を指摘し、「い

じめの4層構造論」を唱えた<sup>(2)</sup>。はやしたてたり声援を送ってみたり、見て見ぬふりをするなど、同調や容認態度をとることでいじめがエスカレートする事態も起きている。このように考えると、いじめは加害者と被害者という当事者間の問題だけではなく、それを取りまく子ども集団全体の人間関係へ視点を変えなければその本質を見誤ることになる。

#### 4. ストレス原因説と規範意識欠如説

いじめを加害者の視点から論じ、いじめの背景には何らかの加害者のストレスや欲求不満が関係しているという考えに立つのがストレス原因説である。同様に、規範意識欠如説とは、子どもの規範意識の崩壊や道徳性の欠如がいじめの発生に深くかかわっているという見方をする。例えば、加害者がいじめた時に、「何も感じない」や「面白いから」という感想を表現する子どもが増えている。これは、ゲームやマスメディアの影響とも深くかかわっていると考えられている。

いじめの背景にはこうした原因や背景、構造があると一般には考えられており、そのいずれかひとつの説に当てはまるいじめもあれば、複数の要因が重なっているものもあり、その原因は簡単には判断できないのである。

### IV. ネットいじめの蔓延

以上に述べたいじめに加えて、近年増加しているのが、ケータイやネットを介した「ネットいじめ」である。

保護者の多くは子どもたちを習い事や塾に通わせると同時に安全安心のため、子どもの居場所がいつでもわかるように、いつでも連絡が取れるように携帯電話を持たせていると考えられる。しかし、携帯電話は子どもたちにとって非常に危うい道具であるということも視野に入れ

ておかなければならない。なぜなら、最近の友人関係を前提としたさまざまないじめが、インターネットの世界にも蔓延し始めたからである。「ネットいじめ」と呼ばれるこの新たないじめは、利便性が向上した携帯電話などの情報ツールを用いて行われている。

ネットいじめには大きく分けて2種類ある。ひとつは「直接型」といわれるもので、本人のホームページに悪口を書き込んだり、勝手にその内容を書き換たり、メールに「キモイ」「早く死ね」といった誹謗中傷を書き込んで送りつけたりする類のものである。もうひとつは「間接型」といわれ、典型的な例が「学校裏サイト」といわれる掲示板の存在である。学校裏サイトとは、その学校に通う子どもたちが自主的に立ち上げた掲示板であり、本来は情報交換の場として非公式に設けられることが一般的であった。しかし、最近では「○○はウザイ」とか「●年●組の××、ムカツク」といった具体的な個人名をあげて誹謗中傷する書き込みが多く見られる。これは検索しなければ自分のことが書き込まれているかどうか分からないが、書き込みがあったことを発見した時のショックは大きい。そうした意味では落とし穴を掘ってターゲットを落とすことを楽しむ「落とし穴型」のいじめと換言することもできる。文部科学省の調査によると、約38,000件の学校裏サイトがあることが確認されている<sup>(5)</sup>。

### V. 現実世界とネット世界で維持される子どもたちの友人関係

ネットいじめについて考える上で重要なことは、今の子どもたちが置かれている状況である。生まれたばかりの赤ん坊は、自分の意思を表すために泣いたり、ときには暴れることもある。言葉が話せない乳児にとっての「意志表示」の方法とも言えるだろう。

子どもが成長し、小学校に入ることになると、少しずつ集団生活を身につけ、社会化されていく。生まれてきたばかりの頃とは違い、自分の思いと実際に起こる事象にズレが生じることが多くなるもこの頃からである。同世代の子どもとトラブルが多発し、そのトラブルのなかで「もうお前とは遊ばない」、「友達をやめる」と言いながら相手や周りの反応を見て、徐々に言動に配慮が見られるようになる。

「どこまで言っても許されるのか、どこまでやってもいいのか」という言動の配慮が培われ始めるのが小学校高学年から中学校頃であろう。この時期は「思春期」といわれ、心が大きく揺れ動く時期でもある。したがって、この時期にネットいじめをはじめとするさまざまないじめが起りやすくなるのである。

思春期特有の心の揺れや不安感、周囲からの視線や言動に対して、常にアンテナを張り巡らせる。「私は、みんなと同じかな」、「みんなからKYと思われてないか」といったさまざまな情報を受信しようとするのである。

なぜ、子どもたちは、ここまで高感度のアンテナを張り巡らせるのだろうか。また、なぜこんなに強い不安感を抱かなくてはいけないのだろうか。

宮台真司は、援助交際を行う女子高生への取材から、従来の「親友」とは秘密を打ち明けられる関係であったが、むしろ秘密を隠す関係に変化してきたと指摘する<sup>(3)</sup>。その要因のひとつに、「意図的にせよ、非意図的にせよ、打ち明けた相手のプロフサイトや日記サイトを通じて、秘密が不特定多数ないし学校の人々に晒される、という出来事が頻発」している点をあげている。宮台はインターネットに秘められた最大の問題は、「オフラインとオンラインとにコミュニケーションが二重化することによる疑心暗鬼」とそれがもたらす「日常のコミュニケーションの変質」なのだと論じている。

ケータイ世代の友だち関係は、「現実世界」と「ネット世界」を行き来して形成される関係である。ネット上で友だちが自分のプライバシーを「ネタ的コミュニケーション」<sup>(4)</sup>として扱う危険性を知っている。したがって、「親友」と認識する仲でさえ秘密を打ち明けたり、心情を吐露したりできず、むしろ、意図的にそれを避ける傾向にあると指摘される。「友だちの仮面を被ぶり、自分を「ネタ」にして嘲笑うタイミングを見計らっているのではないか」、という「疑心暗鬼」が募るなかで、自分の内面を隠すことは裏切られないための自己防衛策となる。

藤川大祐は、用件がないのに絶え間なく続くメールのやりとりのなかで、子どもたちは友だちとの価値観に相違がないことを確認していると指摘する<sup>(5)</sup>。ケータイを用いたコミュニケーションが濃密になるほど、「15分ルール」に見られるような価値観を共有しようとする「同調圧力」はさらに強まると述べる。子どもたちはメールが来てもことさら嬉しくはないが、メールが切れるとイライラするといった「アルコール依存症」ならぬ「メール依存症」の状況にあるという。こうした状態が続けば、メールが来ない友だちは「大したことないヤツ」、頻繁にメールを送ってくれる友だちは「アイツは友だちだ」という解釈が成り立つのである。そこに、「アイツと俺は一緒だ」といった仲間意識を見出すことは難しい。藤川によれば、自分と相手の価値観が「同じ」であることを前提としている友だち関係は脆いと指摘する。価値観の違いを認められない関係は、裏を返せば一人ひとりがかげがえのない存在であると認識できない関係であるといえる。「同調」し合うことに意味をもち、「同調」できない相手は友だちではないという認識が子どもたちの間で強くなる傾向にあることが藤川の指摘から読み取れる。

仲間集団に注目したこれまでの研究では、仲間集団内には連帯を維持する「われわれ意識・感

情 we-consciousness, we-feeling」が共有されていると考えられてきた。そこでは、顧客と販売員といった「役割的な人間関係」ではなく、友情や愛情といった絆で結び付けられた「情緒的な人間関係」が成り立っているとされる。情緒的な人間関係においては、互いに「信頼」し合い、「本音」を語り合い、「秘密」を共有することが求められる。これらの過程を通して他者から承認を受け自己の存在意義を見出していくのである。また、住田正樹は仲間集団の意義は他人性の存在を経験させることにありと述べている<sup>(6)</sup>。同世代の自由で対等な関係のなかで、自己の意見を押し通すためには、異なる意見をもつメンバーと葛藤状態に陥り、喧嘩になる。自分の思い通りにならない他者を仲間集団内で経験することによって、自分とは違う考え方をする他者として仲間を意識し、ひいては他人の権利を認める他者理解が進むのである。かつて、クーリーは「顔と顔をつきあわせている親しい結びつきと、協力によって特徴づけられる」集団を個人の社会性と理想を形成する上で基盤となる「第1次集団」と提唱した<sup>(7)</sup>。

しかし、流動化する社会のなか、友だち関係においても情緒的な絆で結ばれた「確かな」関係性を構築することが難しくなっているといえる。代わって、その場の「空気」を読み間違えないように、自分が「浮かないよう」に徹する「状況志向」<sup>(8)</sup>が高まっている。仲間集団においても、「ノリ」に合わせてその場をしのぐ、友だち関係が形骸化しているのかもしれない。形骸化した友だち関係はクーリーの「第1次集団」の機能を果たすことができないと考えられる。

「現実世界」の「トモダチ」には打ち明け話をしにくい。その一方で、「ネット世界」で出会った見知らぬ他者とのやりとりでは、本音を打ち明けられる、あるいは、相手と寂しさを共感できる、分かり合えると感じられる。かつては「現

実世界」で知り合った者でしか結ばれなかった情緒的なつながりが「ネット世界」の見知らぬ他者との間でも結ばれる現象が起きている。富田英典によれば、「メル友」などオンライン上でのみのつながりが、「現実世界」の友だちと同じように、あるいはそれ以上に「深い話」ができる他者を「インティメイト・ストレンジャー」と呼ぶ<sup>(9)</sup>。インティメイト・ストレンジャーとは、「メル友」など対面したことのない、オンライン上でのみのつながりによって、「現実世界」の友だちと同じように、あるいはそれ以上に「深い話」ができる他者を指す。「インティメイト・ストレンジャー」の関係が成り立つのは、ネット上でいざこざが起きてもいつでもリセットできる関係、つまり、オフラインでの直接的な接触や関係がないことによって、相手に素顔を知らせなくてもよい、プライバシーを守ることができるからである。

## VI. 友人関係の「ネット」化と1.5次集団の形成

今日、子どもたちのなかで現実の人間関係もネット上だけのつながりのようにいつでもリセットできると考える傾向がある。さらに、富田は、子ども・若者たちの現実の人間関係も「インティメイト・ストレンジャー」と同じようにメディアのなかの関係となり始めていると警鐘する。ケータイのメモリの登録・削除の例を出して富田は次のように説明する。従来ならば、友だち関係を「切る」場合は「絶交する」という手段がとられたが、今日では、ケータイのメモ리를削除することが友だちとの関係を「切る」ことを意味するようになったという。メモリの登録・削除によって、友だち関係が成立・解消されるのである。富田の指摘を受けると、ケータイの「on-off」のボタン操作ひとつで「現実世界」の人間関係さえも操作できるという思考

は、やや極端な表現をすれば、「現実世界」の友だち関係の一部が「ネット化」しはじめているのではないだろうか。

ネットいじめを、ネットを用いておこなう新たな手法としてのいじめと単純に捉えてしまうと、ネットいじめの背景にある子どもの仲間意識の変化の兆しを見逃してしまうのではないだろうか。ネットいじめはその特質を考える際に、現実の「トモダチ関係」が「on-off」に切り替え可能な「ネット化」している傾向にあるのではないかという視点は排除すべきではない。現実の友だち関係が「ネット化」すれば、仲良くする相手は自分が孤独に陥らないための手段であり、唯一の存在でなくてもかまわない。すると、ますます情緒的なつながりをもった友だちを作れなくなり、自分のことを理解してくれている友だちの視線から自分を確認できなくなり、「本当の自分」はどこにいるのか、不安と

焦りが増進する。この孤独感をわかってくれるのは、「ネット世界」の見知らぬ他者だけだと思込み、ネット依存になり、犯罪に巻き込まれるといった負のスパイラルに陥ることも決して現実離れしている話ではないだろう。

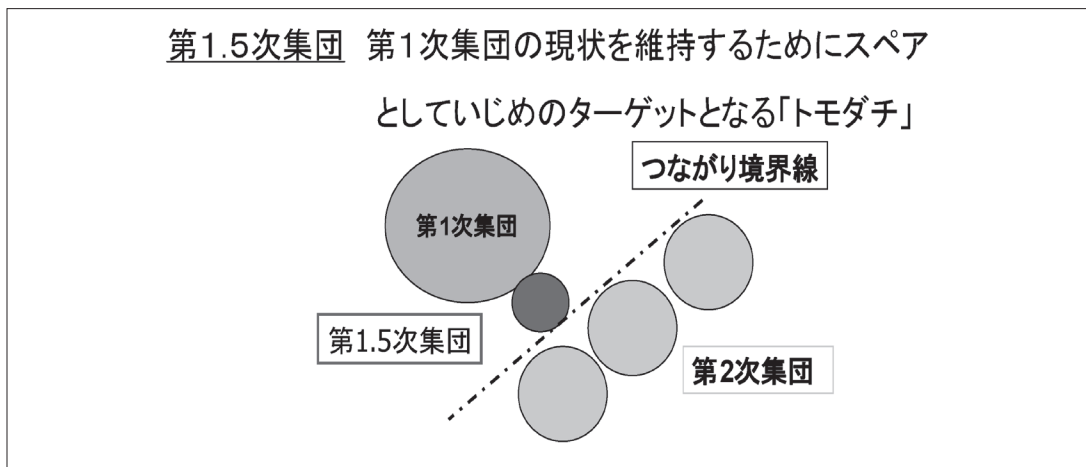
情緒的な人間関係を第1次関係、役割的な人間関係を第2次関係と捉えるならば(表2参照)、富田のいうオンライン上での「インティメイト・ストレンジャー」は第何次の関係になるといえるのだろうか。芳賀学の言葉をかりれば「インティメイト・ストレンジャー」と出会うオンライン上の空間を「1.5次空間」<sup>(10)</sup>と表現することができる。「現実世界」での形骸した友だち関係が「ネット化」しているのであれば、本当の友だち、いじめのターゲットになる偽装された友だちとの2種類の友だちからなる仲間集団を「第1.5次集団」と論じることはできないだろうか。

表2 第1次集団と第2次集団

|       |                                      |                       |
|-------|--------------------------------------|-----------------------|
| 第1次集団 | フェイス・トゥ・フェイスの親密な結び付きと協同によって特徴づけられる集団 | 家族・遊び仲間・近隣集団・地域集団     |
| 第2次集団 | 目的・利害・関心のため意図的に作られ、インパーソナルな関係からなる集団  | 企業・労働組合・政党・大学・宗教団体・国家 |

出典：船津衛『自我の社会学』放送大学出版協会 2005 p.23

表3 「第1.5次集団」のトモダチ





この友だち関係における「on-off」切り替え可能な現象は、今日のいじめの特質のひとつとして、いじめ被害・加害者の立場が逆転するという指摘や、国立教育政策研究所の「いじめ追跡調査2004-2006」(国立教育政策研究所、2009)では、中学3年間でいじめの被害経験のない生徒は2割以下、加害経験のない生徒も2割以下であったことから読み取ることができる<sup>(11)</sup>。「状況志向」を高める仲間集団では、いじめの原因として友だちの秘密や恥ずかしいことの揚げ足をとるように、その場の「ネタ」から「ノリ」で友だちをいじめるという傾向を生んでいる。

「共依存関係のいじめ」の構造にみられるような関係で結ばれる子どもたちは友だちから平然と秘密を晒し、自分を陥れる経験していても「ひとりぼっち」にならないために、「第1次集団」的なつながりを維持しようとしている。友だちとのつながりを保つため、土井(2008)のいう互いの相違をほかすテクニックとして偽装された友だちのネタをあら探しして、ネットを介していじめるのである。

友だち関係を維持するために、グループのなかでいじめ被害者となる「トモダチ」を作り上げる、いじめる・いじめられるモードの切り替え可能である関係が「第1.5次集団」の友だち関係(表3参照)であるといえるだろう。子どもたちは常に行動とともに、情緒的な人間関係を築いている友だち関係とただのクラスメイトという役割的な人間関係をわけていると考えられる。そのあいだに「つながり境界線」ともいえる線引きをおこなっており、仲間集団をダウンサイジングしながら、友だち間での価値観の違いなどからおこるイライラを本人にぶつけるのではなく、第1.5次集団の「トモダチ」にいじめという形でぶつけることで、友だち関係を維持しているのではないだろうか。

## Ⅶ. 今後の研究課題

本稿では、友人関係の変化とネットいじめに関連性について考察をおこなってきた。友人関係の小グループ化に伴い、グループ内の同調圧力が高まりによる息苦しさを解消するために、グループ内のだれかをターゲットにいじめるといった今日的いじめのひとつの手段としてネットを介したいじめが発生していることがわかった。

今回は、特に小グループに着目したが、荻上(2008)の研究によれば、教室での「スクールカースト」がネット世界でも地続きになっており、スクールカースト下位のメンバーがネット世界でもいじめられる傾向にあると指摘する。つまり、クラスメイト同士の指標によって決められる現実世界のスクールカーストがネット世界でも再生産されるのである。これまでは、学校内部で隠蔽されていたいじめがだれでも閲覧できるネット世界で入りこんだことで、可視化されるようになっており、荻上は指摘する。荻上の論に従えば、かつてのいじめのようにクラスメイトが一体となってひとりを集中的にいじめるといった過去にみられたいじめがネットいじめでも発生しているということである。

今後の研究課題として、小グループ内で行われるネットいじめと、集団で孤立した者をいじめるネットいじめは手法が異なるのか、また、なぜ、ネット世界では、宮台(1994)が指摘する「島宇宙化」しているクラスメイトが特定のものへ一体となって集中的にいじめを誘発するのか、を明らかにしていきたい。

### 【付記】

本稿は財団法人社会安全研究財団一般研究助成「ネットいじめの実態とその抑止策に関する実証的研究」(研究代表者：原清治)および文部科学省科学研究費補助金基盤研究(c)「ネットいじめの実態とその背景となる要因に関する実証的研究」(研究代表者：原清治)として2008年

より行っている研究の成果の一部であり、日本実践教育学会第12回大会 (2009.11.7, 於: 岡山大学) における発表と関西教育学会第61回大会 (2009.11.15, 於: 大阪樟蔭女子大学) における発表をもとに加筆修正したものである。

なお、本稿は堀出がⅠ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶを、原がⅡ、Ⅲを担当したが、その責任は両者が等しく負うものである。

### 【注記】

- (1) 文部科学省「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2007 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/11/07110710.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710.htm), 2009.9.16アクセス)
- (2) 森田洋司・清永賢二『いじめ—教室の病い』金子書房, 1994
- (3) 宮台真司『日本の難点』幻冬舎新書, 2009, p.58
- (4) 鈴木謙介『カーニバル化する社会』講談社現代新書, 2005
- (5) 藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書, 2005, pp.94-121
- (6) 子どもの仲間集団に働くメカニズムを研究した代表的なものとして住田正樹の研究 (2000ほか) があげられる。
- (7) C.H. クーリー (大橋幸、菊池美代志訳)『社会組織論—現代社会学体系第4巻—』青木書店, 1970, p.24
- (8) 浅野智彦『若者のアイデンティティと友人関係』広田照幸編『若者文化をどうみるか?』アドバンテジャーサーバー, 2008
- (9) 富田英典『インティメイト・ストレンジャー—「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究—』関西大学出版部, 2009
- (10) 芳賀学「自分らしさのパラドックス」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's [展開編]』恒星社厚生閣, 1999
- (11) 国立教育政策研究所の「いじめ追跡調査2004-2006」(2009)によれば、小学校・中学校の児童生徒たちのいじめ被害・加害の傾向として、高頻度のいじめ被害・加害を繰り返す特定の子どもはごく一部であり、被害者・加害者とも大きく入れ替わるとしている。2004年度調査において、小学校の場合には、中学校よりも更に多くの子ども (85%前後) が、どこかの時期に何らかの頻度の「仲間はずれ、無視、陰口」といった被害経験と加害経験をもっている。

### 【参考文献】

- 荻上チキ『ネットいじめ』PHP新書, 2009
- 香山リカ、森健『ネット王子とケータイ姫』中央公論新社, 2004
- 京都市教育委員会『京都市「ケータイに関するアンケート」について』, 2007
- C.H. Cooley (大橋幸、菊池美代志訳)『社会組織論—現代社会学体系第4巻—』青木書店, 1970
- 『現代のエスプリ2008年7月号』至文堂, 2008
- 国立教育政策研究所「いじめ追跡調査2004-2006」, 2009
- 小林正幸『なぜ、メールは人を感情的にするのか—Eメールの心理学』ダイヤモンド社, 2001
- 渋谷哲也『学校裏サイト 進化するネットいじめ』晋遊舎, 2008
- 下田博次『ケータイ・リテラシー』NTT出版, 2004
- 下田博次『学校裏サイト』東洋経済新報社, 2008
- 鈴木謙介『カーニバル化する社会』講談社現代新書, 2005
- 住田正樹『子どもの仲間集団の研究第2版』九州大学出版会, 2000
- 総務省『情報通信統計データベース』2009
- 土井隆義『友だち地獄』ちくま新書, 2008
- 富田英典『インティメイト・ストレンジャー—「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究—』関西大学出版部, 2009
- 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's [展開編]』恒星社厚生閣, 1999
- 原清治・山内乾史・杉本均編『増補版教育の比較社会学』学文社, 2008
- 原清治『若年就労問題と学力の比較教育社会学』ミネルヴァ書房, 2009
- 広田照幸編『若者文化をどうみるか?』アドバンテジャーサーバー, 2008
- 藤川大祐『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書, 2005
- 宮台真司『制服少女たちの選択』講談社, 1994
- 宮台真司『日本の難点』幻冬舎新書, 2009
- 森田洋司・清永賢二『いじめ—教室の病い』金子書房, 1994
- 文部科学省「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」, 2008
- 文部科学省『青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査報告書』, 2008
- 渡辺真由子『大人が知らない ネットいじめの真実』ミネルヴァ書房, 2008